

## あたたかい涙

田後 寛子（東京都）

白い洗面器に手を入れた途端、手の甲から赤い小さなつぶが現われて、やがて細い何本かの筋となって浮き上がってきました。

さっき薪割をしたときに、ぴり／＼とひび割れたところから滲み出てきたのです。その両手がいとおしく、そっとエプロンで包みました。

私はこの春、働き乍ら定時制高校へ通うことを決心して、この家でお手伝いさんとなったのです。大きなお屋敷では思っていたより、厳しく、時に心が折れそうになりました。

終戦の時、私は九才でした。中国から引揚げてきた霧島の山の麓、開拓地の暮しは、いつまでも貧しく、食べ物も充分ではありません。

「そんなに勉強したいのなら」と許してもらった両親にも申し訳なく帰ることすら出来ませんでした。

その夜は仕事を終えて戻る足も重く、黒光りした階段の灯もぼんやり

としていました。

襖をあけた途端、ふわっと甘い香、あわてて灯をつけました、なんと机の上にケーキ!! 白いクリームの上に缶づめの大きなさくらんぼ、そのまわりにミカンが並んでいました。下宿されていた先生からの「頑張っているご褒美です」と手紙が添えてありました。

あゝ、見ていて下さったのだ、さっき迄の、沈んだ気持はふっ飛び嬉しくなりやがてあたたかい涙が溢れてきました。

私は先生のようなやさしい気持をもっているだろうか？ 自分の事しか考えられない生き方をしていないか？ 自分自身に問いました。

それからの私は御飯を炊き乍ら灰の中に、小枝で字を書き、盥の中の泡でガラスに図を書き、風呂に水を汲み上げ乍ら単語をおぼえ、

仕事は言われる前にやる、知ってるかぎり友達に教える、どんな人にも何の仕事をしている人にもやさしく決して卑下しない。

「先生ありがとうございました、私、今日も愛顔で患者さん一人ひとりと向き合って、一日も早い回復のお手伝いをしています。」

「特別賞」

## 「思いやる気」

野本 浩慎（愛媛県）

『先生、お元気ですか？私は現在、人の人生を応援する仕事をしています。あなたの座右の銘「思いやる気」を胸に抱きながら』

私は小学五年生から中学生にかけて学校を休みがちだった。どこかクラスに馴染めず、先生や同級生と関わる事が不安で苦しくなった。当時は不登校に対する認識も厳しく、怠けや甘えと捉える人もいて、自己嫌悪に陥り、両親にも心配をかけた。

そんななかで当時、唯一、夢中になれるものがプロ野球観戦だった。あるシーズンに愛媛出身のプロ野球選手が活躍していて、僕は中学二年生の十二月に思いきってファンレターを送った。

後日、ポストに一通の手紙が入っており、名字が見えた。「おおっ」一瞬、興奮した。ただ、よく見ると名まえが違う。学校の先生からだった。クラス担任ではなかったが、スポーツマンで爽やかな先生という印象

を持っていた。手紙は「僕とキャッチボールをしませんか？」という内容だった。マジか。ファンレターを送った選手と同じ名字であることに僕は何か不思議な縁を感じた。

「ナイスボール！」時々、ミットに乾いた音が鳴り響き、先生が笑顔で応えてくれる。「あれ？なんか楽しいぞ」先生は仕事が終わるとほぼ毎日、自宅に来て近所の公園でキャッチボールをしてくれた。僕が野球好きなのを知ってくれていたのだ。

中学三年生になり、僕は学校を休まず通うようになっていた。いつの間にか僕の心の中にやる気が生まれていた。振り返ると、頑張っている姿を先生に見てほしかったのかもしれない。そして僕は無事に卒業し、先生は年度末に異動となった。先生とのキャッチボールは一年四カ月に及んだ。

『先生、私を救ってくれてありがとう。思いやりとやる気を合わせた「思いやる気」はしっかりと私の心に引き継がれています。またいつか、キャッチボールしましょう！』

「優秀賞」

## 笑顔の帽子

感王寺 美智子（福岡県）

乳癌になり、抗がん剤治療で髪が抜けた。

覚悟はしていたが、自慢の長い睫毛まで、なくなってしまった時は、シヨックだった。

涙の粒が、コロコロと玉のまま、頬を転がり落ち、鏡を見ることを止めた。

ある通院日のこと。

いつものように俯きがちに、化学療法室に入ると、看護師さんが、声を上げた。

「わあ、感王寺さん、今日は猫耳ついでる！」

看護師さんや患者さんの視線が集まる。

「かわいいー感王寺さんの帽子、いつもユニークで楽しくて、ほっこりするわ」「そうそう、今日はどんな帽子かしらって、今も噂してたの」

治療を受けている皆さんが、ニコニコと、私を見ている。でも、私は。

自分が今日、どんな帽子を被って来たのか、解らなかった。

編み物上手な友人が、私を励まそうと、帽子を、いくつも編んでくれた。けれど私は、その心のこもった帽子を、よく見もせず、いつもただ、髪がなくなった頭を、隠すだけに被っていたのだ。

家に帰り、鏡を見た。頭の上に、ピンと立った猫耳が生えた、自分が映っている。思わず、プツと吹き出した。年甲斐もないが、けっこう、可愛じゃないか。

気がつくと、鏡の中の私が笑っていた。

久しぶりに見た自分の笑顔だった。

そうだ。自分を醜くしているのは、病じゃない、鏡には映らない、今の私の心が醜くしていたのだ。

次の加療日、私は友人が編んだ帽子の中から、ドレッドヘアを真似た帽子を選んだ。

パッチリ、メイクをした。つけ睫毛も、たっぷり盛った。レゲエのリズムを真似て、ちょっと左右に揺れてみた。よし、悪くない。

療法室へ入ると、歓声があがった。

ちょっとしたアイドル気分になった。

「優秀賞」

## 気持ちのお返し

稲井 偉公子（兵庫県）

長女の幼稚園生活は、凄まじい登園拒否からのスタートだった。

近所の子ども達十数人を、当番の保護者が三名で送迎する集団登園。私が当番でない時の長女の騒ぎ様は猛烈で、まるで一本釣りされた鰹のごとく、地面に寝そべりバタバタと暴れる。その鰹と化した娘を、どの当番のお母さんも、毎朝笑顔でヒョイと抱きかかえて連れて行ってくれた。

申し訳なく、毎日当番をしたいと言う私を、「ルールやで、泣いたら思い通りになること教えてどうするん。お母さんも我慢や。」先輩ママが叱ってくれた。

（今日もカバンをおろさず、ずっとお部屋の入口に立っていました。「カバンをロッカーにしまったら、ここにいないといけなくなるでしょ!」と言って。芯が強いですね。頑張れ!）

先生からのノート。娘、そして私も励ましてくださっている。しかし、娘の頑固さに呆れるやら情けないやら。

私が困った顔見せたらアカン。ドンと構えとかな。そう思って毎朝平気な顔をして送り出す。でもある日、鰹娘が見えなくなると、我慢できずに泣いてしまった。

「なんで普通にしてくれへんのかな。なんでうちの子だけ……。ホンマに毎日すみません。」

そんな私に先輩ママがかけてくれた言葉。  
「毎日辛いやろ、泣いたらええねんで。ほんで、申し訳ないなんて思いなや。うちはお兄ちゃんが凄かったな。そんな時先輩ママに言われてん、『次に泣くお母さんおったら、助けたり』って。だから、私らじゃなくて、次のお母さんに気持ち返して行って。助けたって。」

鰹娘は社会人になり、人生の荒波に持ち前の芯の強さと頑固さで立ち向かっている。

私は先輩ママの言葉を宝に、子育て支援員となった。そして、たくさんのお母さんにお返しするべく、日々精進の真っ最中である。

## 映画

佐伯 篤典（愛媛県 高校生）

僕は映画が好きだ。特に一人で劇場へ行き、何も買わずにただ観るのが好きだ。たまに友人と行きもするが、隣で話しかけてくる度に一人で行かなかったことを後悔する。そんな孤高の映画好きである僕が母と一緒に観に行ったのは、実に五年ぶり、小学校以来のことだった。

母も映画が好きだ。独身だった時はよく一人で観に行っていたらしいが、結婚してからはあまり行っていないそうだ。多分、合理主義で映画を時間のムダだと思っている父の影響だろう。そんな母を何を思ってたか、僕はある日映画にさそった。

「どうしてさそったのか。」前日の夜にふと考えてみた。僕ももう高校生だ。一般的に男子高校生がお母さんと映画を観に行くというのが、ゼロではないにしろありえないことだという認識はあった。それでも母をさそった。どうしてか。その答えが出たのは、映画を観た後だった。

映画鑑賞後、入場時と同様に「周りのみんなは、この年で母親と映画を観にくるなんて、信じられないと思ってるよな」という自意識に包まれながら映画館を出て、車の助手席に座った。結局答えは出なかったなど思った。疲れて座席のシートを後ろへ倒して寝ようとした時、母から「またさそってね」と微笑みまじりに言われた。

これが答えだと感じた。この日のことを忘れないと思ったから。周りにどう思われるかなんて関係なしに、高校生になって照れくさくてできなかった、「母を笑顔にする」という重大な任務を、やっとできたと思っただから。

「もうコリゴリだよ。」喜びや恥じらいを抑えながら喋るには、それが精一杯だった。

「特別賞」

## 本当の「愛」

弓岡 夏鈴（愛媛県 高校生）

「自分は他の人とは違う」そんな感情を抱いた経験はありますか。私は、生みの親の顔を知りません。「捨てられた」と気付いた時には、児童施設にいました。

三歳の時、里親に出会いました。病弱だった私は、夜中に高熱を出すことが多かったのですが、目覚めると優しい養父母の顔がそばにあり、安心したのを覚えています。遠足にはおいしいお弁当を作ってくれました。修学旅行の準備の時もかわいい洋服と一緒に買いに行ってくれました。勉強が分からなければ教えてくれ、私が悪いことをして学校に呼ばれれば、仕事を休んでも来てくれました。高校三年生になった今では、愛情たっぷりに育てられてきたのだと実感しています。

しかし、このような穏やかな気持ちで養父母のことを語れるようになるには、時間がかかりました。小学校時代、「親と全然顔が似てないね」

と友人に何気なく言われた言葉でひどく傷付きました。公文書を取ると親と名字が違うので、友人に気付かれるのが嫌で隠していました。そんなこともあり、理由もなく無視したり、反抗したり、困らせるばかりの時期もありました。「本当の親じゃないけん」自分が一番傷付けられた言葉を平気で言ってしまったこともありました。そんな時、二人は悲しそうな表情で黙って私の顔を見ていました。中学生の頃、友達関係で悩んで学校に行きたくないと言った時、「一人じゃないけん、私がおる」と言っただけながら私を抱きしめてくれたのを思い出します。

私は、現在警察官を志望しています。少年課で働き、私のような境遇の子の保護や非行に走った子の更生に関わることで社会に役立ちたいです。里親に育てられたからといって同情されたくはありません。むしろ、本当の親以上に愛情を注ぎ、懸命に育ててくれるこの養父母に出会えて良かった、この幸運をチャンスに変えて今度は恩返しをしたいとは思っています。

## ぎちぎち弁当

黒光 優陽（愛媛県 高校生）

中学校三年生三月、私はその日を迎えた。個人的には勉強してきたつもりだ。不確かな自信と共に志望校である南高校に足を踏み入れた。

一月の頃だ。中学校三年生の冬休みを終え、勉強がとび抜けてきているわけではない私は、受験勉強すぐめの毎日を過ごしていた。十二月の数学のテストで半分の点数を二回連続でとれなかったこともあり、次は六割をとろうと意気込んでいたのだ。しかし現実は厳しかった。五十二点という結果で先生には南高校は五分五分だ。違う高校を考えたい方が良いと言われ続ける結果となってしまった。母は大丈夫だ、南高で良い、の一点張りでそうだねと同意することしかできなかったが、正直とても不安だった。そのときのどうしようもない不安感は今でも覚えている。

冷たい風が吹いた。外は小雨が降っているようだ。覚悟は決めている。後悔なんかするもんかと喝を入れ、テストの問題用紙に向かった。会場は緊張に満ちている。余計私に不安が募った。午前中のテストが終わり、テストの出来を気にしながらも昼食の時間を迎えた。

弁当箱を開けて母が作ったぎちぎちにつまった弁当に目をやる。安心しつつも食べ進めていると、小さな紙が下に隠れていることに気づいた。「午後からもがんばれ。」そこには控えめな母らしい、気遣いが施された手紙が入っていたのだ。目頭が熱くなった。母は私のことを全部分かっていたのだ。特別受験について言及はしてこなかったが、ずっと心配してくれて、誰よりも応援してくれていたのだろう。勇気をもらえたような気がした。

目新しく、さわやかな風が吹く南高で、今日も母のぎちぎち弁当を食べる。これは愛情だよ、悪戯っぽく笑う母を思い出して笑みがこぼれる。あと二年後もまたこの弁当に感謝するのだろうか。「お母さん。いつもありがとう。」口うるさいけれど、私は母が大好きだ。曇った空に晴れ間が見えた気がした。



## 七夕の願い事

三好 陽花里（愛媛県 高校生）

一年前の七夕、私は何を願っただろう。あまりよく覚えていない。

外は茶色く濁った海、二階に逃げ込む私の耳に聞こえるのは、鳴り響く放送と一階から聞こえる自由に動く家具がぶつかる奇妙な重い音。何が起こっているかよく分からなかった。

西日本豪雨。それは私の身に起こった初めての災害だった。途絶えた通信と襲いかかる恐怖の中、母と一夜を過ごした。どうか命だけとは。

目を覚まし、生きていることに安心したのもつかの間、異様な匂いにするのに気が付いた。恐る恐る一階に行ってみる。目に映ったのは、私が知っている自分の家ではなかった。

何も感じない、何も考えない。一日中ただひたすら、ゴミとなった思出の物を外に放り出す作業をした。手を止めてしまえば涙をこぼしてしまいそうだった。

作業中、私は一つのローファーを見つけた。私が高校生になって、

たったの三ヶ月。まだ一度も履いたことのない私のローファーだった。誰かの役に立つために生まれてきたのに、何も果たすことなく使えなくなった。それを見ながら私は、私達人間にも有り得ることだと思った。もしかしたら私は今日、死んでいたかもしれない。誰かのために何かをしたんだ、と胸をはることもできずに、このローファーと同じようになっっていたかもしれない。私は今までの十六年間の生き方を後悔した。

災害があつてから、たくさんの人に支えられた。支援物資を届けてくれたり、家にまで来てくれた、先生、部員、友達がいた。だから私は、この災害を不幸なことだとは思わない。みんながいて私がいる。人の温かさを感じた大きな出来事だった。人のために生きたいと思った。

今年の七夕、私は「人のために生きて、恩返しをしたい」と願った。



## 五人のおばさん

橋本 美衣菜（愛媛県 高校生）

私は十七歳にして、もう五人の甥っ子のおばさんである。一番上は小学生の男の子。小学生を侮るなかれ。口が達者で、私の事をケツデカおばばなどと言ってくる。私はまだ高校生でお肌もつるつるだ。お尻は少し大きくてもおばさんではない。そう言われた時は、こちょこちょ攻撃をして、お姉さんと言い直させるようにしている。しかし、このやりとりも案外楽しかったりもする。それを見た下の子も、まぜてほしいのか、おばばと言ってくる。五人も相手をするのは疲れる。

こう見えて、実は子どもが苦手だったりする。何故好かれるのか分からないが、隠れても見つかって遊びに付き合わされる。姉からは、「いつもありがとね、助かってる。」と言われるので、「子どもたちの相手も悪くない。」とたまに思うこともある。

先日は、子どもたちを連れ公園に遊びに行った。そこで鬼ごっこをしたり、隠れんぼをしたりして遊んだ。その時は、私も小学生時代にかえったつもりで遊んだ。五人で始めた鬼ごっこ。夢中だったので、

子どもが何人か増えていたことに後になって気づいたのが印象的だった。帰りの車で皆疲れきって、五人並んで仲良く寝ていたと言われ、思わずふふっと笑みがこぼれた。そして、なんだかんだ言っていて、私は本当はこの子どもたちが大好きなんだと思った。

これからも、子どもたちの笑顔を見るために、たくさん遊んで思い出を作っていきたい。そして、私も子どもたちのように、周りの人に笑顔を届けたい。